

# 令和4年度長崎市景観まちづくり講座

日時：令和5年2月6日（月） 18：00～20：00

場所：長崎市役所2階 多目的スペース（長崎市魚の町4-1）

## 【講演概要】

### ■まちづくりについて

・ これまでは、人は用があるから街に行く、だからそのための仕掛けをしなければならぬという考え方が主流であった。しかし、これからはむしろ用がないからこそ、あそこに行けば何かあるかもしれない、誰か（特定の人）に会えるかもしれないという期待感をいかに街につくるかが重要になっていく。

・ JR東日本によると、買い物をするために街に30分いた人よりも、なんとなく暇だから街をぶらつき長く滞在していた人の方が、購買金額が高かった。この事例からも分かるように、滞在時間を延ばすことで地域は元気になる。滞在時間を延ばすには、居心地を良くすることや、見ていて楽しいコンテンツをつくることが重要。

・ これまでは、都市の人口規模によって予算の金額に差があり、人口規模が重視されてきたが、これからは人口規模や予算の金額に関係なく、自分の街を面白い人たちがいることや寛容さなどの感性が大事になる。

・ 景観を活かすためには、活動を持続させることが重要。活動を持続させるために、「市場」は大事なコンテンツ。

・ 孤独・孤立・個人の社会の中で、外に出かけていく機会・きっかけ（顔見知りがいる、参加したくなるプログラムがあるなど）を街側がどのようにつくっていくかが重要。

・ 人口減少の時代ではあるが、一人の活動量が増えれば問題ないのではないか。

・ 地元の旬の物を街角で売っていたら観光資源になる。（事例：青森県八戸市 食用菊のマーケット）

・ 客のニーズにあった工夫をすることで成功した事例。高校生が顧客の駅前で、さつまいもは売れなかったが焼き芋は売れた。（事例：神戸市伊川谷の野菜を売るマーケ

ット)

・長崎には多様な人が訪れるため、誰に何が届くかわからないという部分がポテンシャル。

#### ■15分都市について

・15分圏内に自分の生活に彩りを与えてくれるものがあるかということが世界的に注目されている。例えば、気分転換できる美味しいコーヒーが飲める、居心地が良い公園があり、そこに行けば友達がいておしゃべりができる、新鮮な野菜が売ってあるなど。

・長崎市には、人が集まる場所が1.5km圏内に3か所（長崎駅・新市庁舎・出島）あり、それぞれ来場者のピーク時間がずれているため、色々な活動を起こしやすい。

・長崎市にパーソナルモビリティとモバイルバッテリーを取り入れれば、天然の15分都市になる。長崎市の強みは「コンパクト」さ。

#### ■広場について

・広場（オープンエア）は、都市やまちなかであっても、そこに佇むことで風にあたり気分転換ができ、自然を感じるができるという意味で重要。

・公園や学校、図書館、市役所などは、そこでなすべきことが決まっているが、広場は具体的な機能がない空間、自由に使っていい場所。

・一般的に広場には「～できません看板」が多い。「～できます看板」を広場ごとに考えたらいい。（事例：愛知県豊田市のスケボー、BBQができる駅前広場「新とよパーク」）

・広場は何もない空間のため、その場にいる人のムードがその空間のムードをつくる。

・広場のような広い空間で出店すると、狭い店内に入りづらい人たちが周囲の人を気に掛けることなく買い物できる。（事例：青森県八戸市「八戸まちなか広場マチニワ」）

・イベントというと、これまではイベント会場全面にブースを並べて行うことがほとんどであった。これからは、居心地のいい（テーブルやイスがあり座っていたいような）広い空間があり、その中に飲食店があったり、花を売っていたり、手芸があった

りするような、様々なサービスを分散させる空間を目指していくことが重要。

・ワンストップサービス（1つの受付に行ったらどの広場でも使うことができ、どの広場がどのような状態であるかを認識できるシステム）をつくることが最も重要。使いやすい「環境」と、どうしたら使えるかという「仕組み」、使いたくなる仕掛けがあれば、皆にとって使いやすい場所になる。

・広場では趣味でつくった物でも商売ができる。（事例：埼玉県志木市 デコレーションしたスマホケースのマーケット）

### ■実証実験について

・価値観が変化している現代では、実証実験のようなお試しをする期間が必要。お試しをすることで、立地による強みやポテンシャル、来場者の個性や属性を知ることができ、どの場所がどんなことに向いているかが分かる。

## 【ディスカッション概要】

### ■自己紹介、活動紹介（河原さん）

・十善寺地区まちづくり協議会では、広報誌の発行、唐人屋敷の境界調査、地区内道路計画の検討、観光客や買い物客が利用できるような長椅子の設置、空き地・空き家・街灯マップの作成、高齢者単身・夫婦世帯分布マップの作成及び避難地の検討、ランタンフェスティバル唐人屋敷会場の企画・運営等の活動を行っている。

・市内の高校生がボランティアでシャッターに中国風の絵を描く、シャッターアートの取り組みをしている。

・その他、唐人屋敷のモニュメント・サイン整備、資料館整備、無電柱化・唐人屋敷大門・誘導門の整備、ロウソク祈願四堂巡りの体験プログラムの実施をしており、現在は土神堂前広場を整備中。

（山下さん）長崎の人はグラフィックが上手。絵になる空間がたくさんある。

### ■自己紹介、活動紹介（岩本さん）

・南山手の古民家に住み、月に一回程度オープンデーを設け、地域の人と食事会を開き、子供たちと流しそうめんをするなど、少しでも斜面地に住む人が増えるように、斜面地の住環境の良さを自ら体験しながら発信する活動をしている。

・その他にも、斜面地ピクニック、ちゃぶ台モーニングといった活動もしており、3軒の空き家を再生した実績もある。

・昨年12月にはネオ観光案内所「HUBs Ishibashi」がオープンし、長崎市まちぶらプロジェクトに認定された。案内所では、ボランティアガイドが長崎居留地の紹介をするだけでなく、訪れた人がイベント等に関わってもらえるような関係性を構築できるよう「関係案内所」とした。

（山下さん）長崎の斜面地は素晴らしい場所で、大事にして欲しい。以前、岩本さんとオンライン会議をしたときに、岩本さんの家から見えた風景に驚いた。

#### ■山下さんの話を聞いての質問・感想

（河原さん）今後どうしようか悩んでいるが、何か良い解決方法はあるか。

（山下さん）解決方法はなく、やってみるしかない。変化の時代が急なので、考えずにやってみるスピード感が大事。

（山下さん）以前、長崎駅のペストリアンデッキのごみの片付けを、一人ではなく、複数人で行っているのを見かけた。また、長崎は限られた土地の中での場面転換が激しく、長崎の人はそれに対応するための身体がある。長崎の人のすごいところは、身体が動くところと、皆で解決しようというマインドがあるところ。

（岩本さん）ワンストップサービスの話を聞き、気づきがあった。居留地エリアには洋館や広場など、絵になるような魅力的な場所があり、使いたい人がいるだろうから、HUBsで施設の借り方の紹介もしたらいいと思った。

（山下さん）公共空間使用の申請方法について、行政でなくても、誰か一人が知っていて教えてあげることが必要。

（平山さん）ランタンフェスティバルや居留地まつりなどのイベントを開催することで、広場等の公共施設の使い方を知る機会となる。

## ■自分の地域の公共空間を使った活動で工夫していること

（河原さん）十善寺地区では、高齢者や外国人が増えている。自分が住んでいる場所を好きになってほしい。どうしたら人を繋げるか、コミュニケーションの場をつくることができるのか。

（山下さん）出島の「はしふき」の活動のように、日時と場所を決めておくことが重要。「はしふき」の日程に合わせて、長崎へ出張に来るような人もいる。このような活動は、人と出会い、ちょっとした相談ができる場となる。話せる機会・タイミングをどう仕掛けるかが長崎には重要。

（岩本さん）自分が居留地に移住してきたとき、居留地まつりで発表の場を設けてもらった。このように、地域デビューできる場があるといい。

（岩本さん）HUBs では、一緒に壁を塗るなど手作りで場をつくり、プロセスを共有する工夫をした。

（山下さん）皆で一斉に始めるのではなく、365日24時間、思い立ったら2、3人でも小さく始めてみるのが大事。

## ■活動を行ううえで、公共空間に求められる機能

（河原さん）私の地域には文化財的な建物が多い。古いものを後に引き継いでいきたい。1、2人参加すれば続けて参加者が増えるだろう。

（平山さん）若者代表の岩本さんから見て、河原さんの地域での活動を何か手伝うとしたらどんなことができるか？

（岩本さん）まちなみが面白い場所。シェアハウスなどできたらいいなと思っている。

（岩本さん）館内・新地エリアは修学旅行生が多いが、話せる機会がないため、ゆっくり過ごせるスペースがあるといい。

（岩本さん）観光・イベントなど非日常的な内容だけでなく、日常的な暮らしの情報も伝えていきたい。

（岩本さん）居留地まつりは年に一度だが、365日ふらっと関わられるスペース・コト

を起こしていけたらいいなと思っている。

（平山さん）参加者の皆様から何かご質問はありますか。

（参加者）山下さんの活動のなかで、中高生を巻き込んだ事例はあるか。それと、今日のイベントの情報があまり発信されていなかったのので、情報のワンストップについてもお願いしたい。

（山下さん）例えば、熊本市の事例がある。熊本城の前の広場空間があり、最寄りの高校に広場に関わってくれないかとお願いしたところ、声をかけてもらえてありがたいと言われた。学校は文科省から、学生を地域と関わらせるように言われている。中高生は、普段通りかかるような場所であれば、きっかけさえあれば関わってくれる。

（山下さん）サラリーマンでも同じ。以前、金曜日の飲みに行く前の時間帯に、現地で広場の使い方についての説明会をしていた。すると、説明会の参加者だけでなく、その場にたまたま居合わせた人の耳にも自然に入るため、興味をもってもらった。耳というのは常に開かれているものであり、実は目の情報よりも耳の情報の方が大事。

（平山さん）耳の話でいうと、長崎は音景観（サウンドスケープ）が素晴らしい街。

（平山さん）情報のワンストップ化については、長崎市の「井戸端パーティ」などを活用していきたい。

（山下さん）ここに登録すれば、街に関する面白い情報が自動的に入ってくるというような仕組みがあるといい。

（平山さん）山下さんから最後に一言。

（山下さん）居留地まつりがコロナ禍でオンラインになったが、番組を拝見して感動した。長崎の皆さんは構図、「映え」をつくるのがとても上手なので、共通のハッシュタグを付けて活動をどんどん発信して欲しい。

（平山さん）本日のお話をぜひ皆さんの地域に持ち帰って、活かしていただければと思う。本日はありがとうございました。